

## 120. 昭和58年度滋賀県下における発掘調査の紹介 その2

### 8. 陰陽道の呪符出土

大津市大萱 東光寺遺跡

東光寺遺跡は従来より白鳳様式瓦やカットガラス椀片の出土で周知の遺跡である。このたび、マンション建設に先立ち、県教育委員会・滋賀県文化財保護協会によって発掘調査を行った結果、2時期の遺構、遺物を検出した。

上層からは、11世紀後半の掘立柱建物2棟とそれを画するように人工溝が検出された。建物は8間×6間以上の総柱の南北棟と、4間×3間の総柱の東西棟で、

建物方位はそれぞれ磁北に対して12°～15°東へ振っている。前者の建物の北東隅の柱穴からは2点の呪符が出土した。同時にこの建物の東面の雨落溝から桃の果核がまとまって出土しており、陰陽道にもとづく何らかの祭祀が行われたことは確実である。これらの建物の柱穴や溝内からは、多数の土師器・黒色土器・木器などが出土している。

下層からは、7世紀後半から8世紀前半にかけての柱穴群、磁北に対して正方位の3間×3間の総柱の高床式倉庫1棟(建替1回)、井戸、人工溝などの遺構とともに同時期の須恵器・土師器、瓦、鉄滓、フィゴの羽口、各種の金属器・木器が出土した。特に、倉庫跡の柱穴からは荷札と思われる木簡が、自然小河川跡か



呪符

らは海獣葡萄鏡(径6.4cm)が出土した。また、8世紀中頃に築造され、すぐ廃絶した井籠組の井戸(内法1辺1.1m、残存4段)の最下層からは殺馬祭祀と思われる馬骨(下アゴの右半分)が出土した。他に、墨書土器、円面硯、転用硯なども出土しており、この遺跡の性格の一端を示している。

(滋賀県文化財保護協会 岡本武憲)

### 9. 石山貝塚を発掘

大津市石山寺三丁目 石山貝塚

石山貝塚は、琵琶湖から南流する瀬田川西岸に位置する石山寺の山門から南方約100mに存在するわが国屈指の縄文時代早期(約6000～7000年前)の淡水産貝塚である。

当貝塚は、昭和15年に発見され、同16年から35年まで計6回の発掘調査が、平安高校・京都学芸大学等によって実施された。それらの調査の結果、貝塚の規模は東西約50m、南北約60mの広範囲にわたり、貝層からは石組の炉跡や5体の屈葬人骨が検出され、その中の1体はヤカドツノガイを切断した貝小玉の頸飾りをしていた。貝層はセタシジミ・ナガタニシを中心とする20数種類で形成され、フナ・コイ・スッポン・サレイノシシなどの骨もみられ、当時の食生活の様子の一端がうかがわれた。また、石斧・石鏃・石匙などの石器類、骨鏃・鹿角斧などの骨角製品や多量の縄文式土器が出土した。土器は、層位関係が明確なことから、押型文・穂谷式・茅山式・柏畑式・上ノ山式・入海I式・入海II式・石山式に分類され、近畿地方縄文時代



貝層断面

早期の標識遺跡として注目されることとなった。

今回の調査は、大津市石山寺観光駐車場とレストラン石柳との境界の崖面の長さ約25m、高さ約1.6mにわたって実施した。層序は表土・灰黒色砂質土・純貝層(50~160cm)・混土貝層(10~20cm)・黒色土(約20cm)・褐色土(約20cm)・淡黄褐色土層(無遺物層)である。黒色土から押型文・穂谷式の土器片が出土した。調査範囲が約7㎡と極めて小規模であったせいか顕著な遺構は認められなかった。

当該地の現地保存が困難と思われたので、貝層断面の縦2m×横2mについて剥取り転写工事と調査作業をVTRに収録した。

(大津市教育委員会 吉水真彦)

## 10. 切妻大壁造住居等を検出

大津市皇子ヶ丘二丁目 北大津遺跡

北大津遺跡は、昭和48・49年湖西線北大津駅建設及び周辺整備事業に伴う発掘調査により発見され、弥生時代末期から奈良時代までの竪穴住居・掘立柱建物・溝状遺構などの遺構に伴って多種多様な遺物が出土した。遺物中、大津京と関係すると思われる木簡1点が見られた点、特に注目されている。

今回の調査地点は、先述の地点と南接しており、当遺跡の範囲確認・鍵形の溝状遺構の性格と大規模集落の変遷を確認する意味で調査を実施した。

調査の結果、調査対象地全域から6棟の住居跡を検出した。古墳時代前期の竪穴住居1基・古墳時代後期(6世紀前半)の竪穴住居2基・飛鳥時代(7世紀前半)の切妻大壁造住居1棟・白鳳時代(7世紀中葉~後半)の竪穴住居1基・奈良時代の掘立柱建物(2間×2間以上)1棟の各時代のものである。すなわち、各時代の集落跡は確実にこの地点まで広がっていることが判明した。古墳時代前期の住居は、前回の調査の検出住居跡の配置を考え合わせると中央に広場を有し、しかも東海系の土器を多く含んでいることが確認され



住居跡検出状況

た。西側丘陵に立地する皇子山古墳と北大津遺跡の関係が注目される。また古墳時代後期の住居と皇子山古墳周辺の山田古墳群などの横穴式石室墳との関係も同様のことがいえる。さらに前回の調査で不詳であった鍵形の溝状遺構は、大津市穴太・滋賀里に分布する渡来系氏族の住居と推定される切妻大壁造り住居と考えられる。したがって、この種の住居は錦織から滋賀里・穴太の範囲に集中して所在する特殊な集落と思われる。(大津市教育委員会 吉水真彦)

## 11. 縄文時代後期の住居跡

大津市唐崎四丁目 穴太遺跡

西大津バイパス建設に伴う第3次調査は、第2次調査地の南側(F区)と穴太瓦窯の北側(D区)の2箇所である。D区は、上下2層よりなり、上層で弥生時代中期の土壌、下層で縄文時代晩期の甕棺墓3基と河川、樹木根を検出した。F区は4層の遺構面があり、1~3遺構面は6世紀末~7世紀中頃にかけての集落跡であった。第4遺構面は縄文時代後期の遺構面で、前年度に検出された根廻り16mの大樹根、配石遺構に連続するものである。遺構は、調査地の北隅に東流する河川と、それに通じる支流が中央部を流れ、河畔にイチイガシ・カヤ・カエデの樹根が検出された。さらに、東隅に4基の竪穴住居跡・配石遺構・土壌状遺構が見出された。

住居跡は、直径5m前後の円形のもの1基と一辺5m前後の隅丸方形のもの3基があり、幾つかの切合いにより円形から方形に変化していることが判明した。うち1基からは石棒、石皿、磨石が出土した。配石遺構は、中心とそのまわりに時計の文字盤状に石を配しており、朱塗土器、ミニチュア土器が出土した。河川際にある土壌のうち2基は、直径80cm深さ50cmの穴に下からイチイガシ・ナラ・クルミ・トチの実を詰め木の葉でおおったものと、直径30cm深さ20cmの穴にトチの実だけを詰めただけのもので、常に水に漬かっており、シ



住居跡・配石遺構・谷川など

ブ抜きを兼ねた貯蔵穴と考えられる。また、1基からは、男女の性生殖器を象徴化した木製品がセットで出土した。

この様に当時の自然環境が、そのまま顕現され、しかも呪術力の支配した縄文時代において、経済生活と精神生活の場が具体的に明らかにされた点で極めて注目すべき内容である。(財滋賀県文化財保護協会)

林 博通・仲川 靖・奈良俊哉)

## 12. 新たに白鳳期の寺院跡を発見

大津市坂本本町字八条 坂本八条遺跡

坂本八条遺跡は、京阪電鉄石坂線坂本駅の東北方向約350mに位置し、大宮川の南方約100mにあたる。

大津市坂本地域は、縄文時代から古墳時代後期の遺跡と中世・近世の延暦寺・日吉大社関係の遺跡・建造物が存在し、歴史の宝庫として著名であり、最近では町なみ保存地区として注目されている。

当該遺跡は、従来からまったく予期しない地点での、しかも、坂本地区の歴史の空白を埋める遺構の発見であった。すなわち、白鳳時代(7世紀後半)の溝状遺構と掘立柱建物(2間×1間)1棟と平安時代末期(12世紀後半)の梵鐘鑄造遺構の2遺構のことである。

### 1. 白鳳時代の遺構と遺物

調査対象地の北側と東側に鋸形の溝状遺構が検出された。溝の長さ33m、幅3.6m、深さ0.5mを測るU字形のものである。溝内から複弁蓮華文軒丸瓦15点、重弧文軒平瓦7点、丸瓦・平瓦コンテナ箱約20箱・土師器・須恵器コンテナ箱3箱の遺物が出土した。瓦類のうち複弁蓮華文軒丸瓦は、いわゆる大津京跡推定地に存在する崇福寺跡・南滋賀廃寺・園城寺遺跡・穴太廃寺の四か寺と瓦当等比較検討すると製作上の特徴が異なっている。掘立柱建物は、5.0m×4.2mを測り1間×2間である。掘り方内から単弁蓮華文軒丸瓦1点が出土した。大津京四か寺と隣接した当該遺跡との関係が注目される。また、付近に郡園、倉園神社が鎮座し、



梵鐘鑄造用掘込み施設

名称から滋賀郡衙の可能性もある。

### 2. 平安時代の梵鐘鑄造遺構

当該調査対象地の南端において、南北1.7m、東西1.96mを測る隅丸方形の掘形をもつ土壇が検出された。深さは検出面から約40cmを測る。土壇内からは、梵鐘の鑄型片(竜頭部分他30点)



軒丸瓦



軒平瓦

・銅滓・焼土・炭等が出土した。土壇底面は、中央部東西方向に、幅0.15mの2本の溝があり、両端は円形を呈していた。壇内四隅には柱穴を有する。

この種の遺構は、現在、全国で8箇所確認され、奈良時代後半から室町時代のものである。滋賀県内では、大津市滋賀里長尾遺跡、愛知郡秦荘町の軽野正境遺跡がある。(大津市教育委員会 吉水真彦)

## 13. 国家鎮護の密教法具を検出

大津市坂本本町 延暦寺東塔遺跡

比叡山の奥深く山林に囲まれた東塔は、延暦寺堂塔伽藍群の中心として有名である。本調査は防災に伴う発掘調査の3年目にあたり、今年度は北谷の一部や大講堂の周辺を調査した。

根本中堂の北側の谷筋が北谷であり、急峻な斜面地を切り開いて平坦地をつくり、各所に平坦地がみられ「三千坊」と形容された僧坊跡があったと思われる。標高640m程にある1,500㎡程の平坦地に江戸時代中期の僧坊跡が確認できた。7間×6間の平面形が凹の字をなす建物であり、正面が直線部で西に面する裏側がコの字状になっている。そのコの字形にはさまれるように4m四方の石組遺構が確認された。深さ2m程であり、性格等については不明である。礎石には平たい



密教法具出土状況

石の他に五輪塔の笠や台座を転用したものを多用している。建物の北側と西側には中世の土塁が残っている。

大講堂周辺部では、昨年度に引続き調査を行った結果、昭和31年10月11日消失した前大講堂の雨落ち溝を検出した。同時に、そのまわりに安鎮法にのっとりた国家鎮護の儀式を行ったと考えられる密教法具をおさめた遺構が確認された。この遺構は地中約50cmに、堀方一辺80cmの穴を掘りその中央に天台宗の作法どおりに、中央に輪法を置き、その上から輻を立て五宝を散らし輪法のまわりに土器を配置したものである。今回の調査で5箇所確認できたが、おそらく作法からみて大講堂の周囲八方に配置したものである。この儀式を行った時期については確定的ではないが、嘉永7年か明治42年のどちらかではないかと推察できる。時代が新しいとはいえ、安鎮法の実態のわかる貴重な資料として注目される。

(叻滋賀県文化財保護協会 神谷友和)

## 14. 銀象嵌の鍔を発見

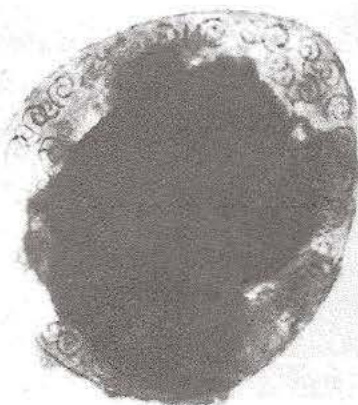
高島町音羽 音羽古墳群

音羽古墳群は高島町の南に位置し比良山地の北限にあたる。この古墳群は6世紀後半から7世紀初頭にかけての典型的村落形群集墳で全体として約50基から成る。

今回、石穴支群14号墳より銀象嵌が施された鍔が出土した。14号墳は江戸時代の開田の際に墳丘を中心に上部構造が破壊されている。調査によって本来は横穴式石室であることが確認され、玄室長さ4.7m・巾1.8m、羨道巾1.3mの規模を有し床面に偏平な河原石による敷石がみられる。鍔は玄室奥壁の右側で検出された。しかし、玄室内は盗掘を受けており正確な原位置は不明である。古墳の築造は6世紀後半から7世紀である。

銀象嵌が施された鍔の発見は、大刀の鍔として現場

で取りあげ、整理室で谷本調査員がこびり付いた土砂をすこしずつ除去して、鍔の表裏に渦巻文を確認したところから始まる。そこで、急きょ元興寺文化財研究所保存科学研究所に遺物を持



銀象嵌を有する鍔のX線透過写真

込みX線透過撮影を行うと写真のような渦巻文の銀象嵌文様が判明した。鍔は倒卵形で長径7cm、短径5.5cm、厚さ0.5cmで6個の台形透穴をもつ。渦巻文は左巻きで1回転半を基本とし3列みられる。保存の過程で巾頭にも連続渦巻文も観察された。

この大刀は現在鍔のみ出土しており柄・刀身については欠損している。元来は円頭大刀であったのだろうと推測される。大刀としては儀仗刀として使用されて、古墳の被葬者と共に玄室内に置かれたのであろう。

この調査によって、古墳内より出土した鉄器類については一応X線透過撮影を実施し錆にかくされた資料をひとつでも多く甦らせることの重要性が痛感された。特に儀仗刀の内の環頭大刀を有するとき首長格の墳墓より出土した大刀については必要調査事項であろう。

(高島町教育委員会 白井忠雄)

## 15. 湖底遺跡で多量の齋串を検出

湖北町尾上 尾上遺跡

本調査は、湖北町による農村基盤総合整備事業に伴う事前発掘調査である。

当遺跡は余呉川により形成された三角州の先端に位置し、現在は陸地化されているが以前は低湿地であった。

調査の結果地表下約4m(標高82m)より、石敷遺構・瓦敷遺構が検出された。

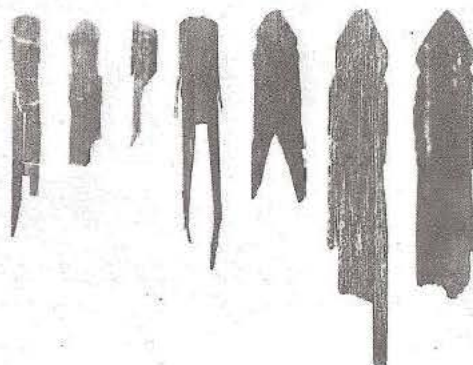
石敷遺構は自然石を3×2mの範囲に不規則に敷いているが石の上面はほぼ同一レベルである。

瓦敷遺構は径約50cmの範囲に平瓦の破片(一辺5~10cm)を敷きつめており上面は磨減が著しい。

またこの下層青灰色砂上面で齋串が多量に出土した。齋串は径3~5mの範囲に厚さ約5cmで重なっていた。

これらの遺構の性格については調査範囲がせまく他に関連する遺構が検出されなかったため現在不明であり今後の調査に期待したい。

(湖北町教育委員会 山崎清和)



尾上遺跡出土の齋串